

緑色の犯罪

甲賀三郎

使用方法

目次の操作方法

表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わるので、ここでクリックすると該当のページまでジャンプします。

本文から目次へのジャンプ方法

本文ページの右上にボタンがあります。これをクリックすると、目次のページまでジャンプさせることができます。

ニッケルの文鎮

悪 戯

惣太の経験

原稿料の袋

ニウルンベルクの名画

緑色の犯罪

妖光殺人事件

发声ファイルム

誰が裁いたか

羅馬の酒器

開いていた窓

誰よりも「本格」たらんと希つた作家

緑色の犯罪

ニッケルの文鎮

ええ、お話しするわ、妾あしたどうせお喋りだわ。だけど、あんたほんとに誰にも話さないで頂戴。だつて妾、あの人に対するもの。

もう一年になるわね。去年の丁度今頃、そうセルがそろそろ膚寒はだくなつてコレラ騒ぎが大分下火になつた時分よ。去年と云えば随分嫌な年で、新聞には毎日のように、自殺だの入殺しだの発狂だのつて、薄氣味の悪い事ばかり、それにあんた知つてるでしょう。妙な泥坊の事、ねそら、希代に大きな宅ばかり狙つて、どこから這入はいつてどこから出たのやらちつとも分らないのに、いつの間にか金目のものがなくなつていたり、用心すればする程面白がつて、思いがけない方法で忍び込んだりして、どこからでも這入るからまるでラジオの様だと云うので、新聞に無電小僧ラジオなんて書かれて随分騒ぎだつたでしよう。それとどうとう終しまいには御恩になつた先生があの死様でしよう。妾ほんとうに悲観しちやつたわ。

無電小僧と云えば、あんたあの話知つてる？ 去年の春だつたか牛込のある邸やしきの郵便受の中に入銀行の通帳と印形を入れてあつて、昔借り放しにしていたのをお返しするつて丁寧な添手紙添手紙がしてあつた

と云う話。新聞に出てたでしよう。あそこの主人の清水つてお爺さんで、何とか議員をして上面は立派な紳士なんだけれども、実は卑しい身分から成上った成金で、慈悲も人情もない高利貸しなのよ。

今じやもう警察の御厄介になつて、おまけに呆けちまつて、誰も見向きもしないけれども、ほんとにひどい奴で、先生の亡くなられたのも、つまりあの業突張りのためだわ。そんな怨張爺だから、手前が銀行では盜難の届けの出ていた所だから、忽ち爺さんは警察へ突き出されちゃつたの。何遍も云う様だけれど、爺さんは慾張りで、僕約だなんて大金持の癖に、いつでも薄汚い身装をしているもんだから、何とか議員だつて警察には通じやしないわ。それでとうとう一晩拘留せられたのよ。痛快じやないこと、ところが泣面に蜂と云うのは爺さんが警察に宿つてゐる晩に、無電小僧に這入られたのよ。この事は新聞に出なかつたんだけれども、訳があつて妾は知つてゐるの。郵便受の中へ銀行の通帳を入れたのも無電小僧の策略だつたんだわ。ほんとに好い気味つたらありやしない。

妾はほんとにこの爺が嫌いで仕方がなかつたんだけれども、月の中に一二度はきっと宅へやつて来るので。そうしちゃ診察所の帳面を調べたり、書生さん達や妾に用を云いつけたり、そりや横柄なの。先生はあんな優しい方でしよう。黙つて平氣で見ていらつしやるんでしよう。妾歯搔ゆくつて仕方がなかつたわ。妾馬鹿ね。一年も御奉公しながら、なんで清水の業突張りがこんな事をするのか分らなかつたの。男は矢張り賢いわ。着物の柄を見る事なんか駄目だけれどもね。下村さんや内野さんは、——書生さんの名よ、——一人とも妾より後から來たんだけれども、ちゃんと分つたと見えて、教えてくれたわ。何でも先生が御研究のお金に困つて、清水からお金を借りなすつたんだつて、それがひ

どい仕組みで、どうしても返し切れないようになつていて、利に利が嵩んで、とても大変なお金になつたんですつて。それでお宅の方も診察所の方もすつかり抵当に取られて、月々の収入も大方は清水に取られてしまつて、先生の方へはホンのポツチりしか這入らないんですね。会計の方は一切清水が握つていて、云わば先生は清水の懐を肥すために、毎日働いていなすつたんだわ。先生はいろいろ御本をお書きになつて、世界に知られた方だつたし、御診察の方も名人だつたんですから、名譽を考えばこそ、清水にそんなひどい事をされても黙つていなすつたんだわ。それに奥様は永い御病氣でどつと床に着き通しですものね。妾この頃になつて先生のお心持を察するとほんとに自然に涙が出来来るわ。

普通の人間だつたら、どうせいくらくらい稼いだつて、他人の懐を肥すだけですもの、働くのもいい加減嫌になる筈だけれども、先生は患者さんにはそれは御深切だし、前云つたように、診察は名人だつたから、中々流行つたわ。でもね、亡くなりなすつた少し前から一層研究の方にお凝りになつたので、自然患者さんも前程ではなかつたようだつたわ。ですから奉公人の数も、妾の来た当座とは少し減つたの。診察所の方は薬剤師が一人と会計の爺さんとで、この二人は通い、その外に先刻云つた下村さんと内野さんの書生が二人。外に看護婦が二人。それは随分顔振が変つたわ。しかし看護婦なんてものは起きてるうちは病人を豚の子かなんぞのように扱つて、寝てしまえば自分が肥つた豚みたいにグウグウ鼾を搔いて、それこそ蹴飛したつて眼を醒ましやしないんだから、誰だつて構やしない事よ。奥の方は御飯たきが一人、奥様附きが一人、それに妾が先生づき。ええ妾は旦那様とは云わずに先生つて云つてたの。御飯たきはもういい加減の婆さんで、台所ばかりに居たし、奥様附きはお米さんと云つて、一遍嫁いた人で妾よりは十位年上でしよう。おとなしい人で、それに寝た切りの奥様に附

いているのですもの。沁々話す暇もなかつたわ。ええお子さんはなかつたの。そう云う訳で、診察所

の方の人達と口を利くのは妾だけと云つて好い位だつたわ。そりや妾がお侠だからだけれども、先生の小間使ですもの、そりやどうしたつて診察所との交渉が多いわよ。ええ、こりや漢語よ。

それで書生さんの下村さんと内野さんとがとても素敵なの。そりや好い男なのよ。あら、そんな事

云うなら、もう話を止すわよ。

二人とも二十四五だつたわ。内野さんがなんでも三月か四月に来て、それから一月程して下村さんが來たの。二人とも江戸っ子だつたわ。無論お互に前は知りつこなし。よく旨く揃つたものだわね。どつちも好い体格でね。肉体美で云うのね、デップリ肥つているんでなしに、スラリとしているんだけれども、肉が締つているんだわ。下村さんの方は色が白くてニコニコすると、そりや愛嬌があるんだけれども、眼許に少し陥ひんがあつてね、どつちかと云うと考え深そうな顔でした。内野さんは少し浅黒い方で、ハイカラな言葉で云うと、そりや明るい顔なの、だからまあ、下村さんの前では打解けて話しても心の隅にはどつかこう四角張つた所が残つてゐるような気がするのだが、内野さんの前では心底から打解けて気が許せると云う位の違ひはあるの。ええ、そりやまあどつちかと云えば、内野さんの方が好きだつたけれども、下村さんだつて好きだし妾困るわ。妾だけじゃなくてよ。誰でもきつと困ると思うわ、学問の事は妾には判らないけれども、二人とも何でもよく知つてゐるらしいのよ。頭脳かのうだつて両方大したものよ。むずかしい事を云つてよく議論するの。昼間ならまだ好いけれど、夜遅くまで書生部屋でやるんでしょう。妾寝られなくつて困つた事があつたわ。妾にはよく分らないけれども二人ともちつとばかり、ほら、あの社会主義とか云うんないかと思つたわ。

先生はあとから考えて見ると、あの頃少し夢だつたわ。先の短い人のように、一分一秒を惜しんで

せつせと暇さえあれば書斎に籠つて書物ばかりしてらつたし、それにこうなんとなく打沈んで元氣がなかつたし、妾なんだか近い内に變つた事が起りそうで仕方がなかつたわ。

あの晩ね。宵の内に内野さんと下村さんの二人でそりや大議論をしたのよ。先生は書斎でいつも通り御勉強でしよう。妾お次室つぎに坐つてゐると、書生部屋で二人が大声で云い争つてゐるのがよく聞えるのでしよう。妾喧嘩になりやしないかと思って心配して、留めに行こうかと思つてゐるうちに、先生がお呼びでしよう。ハーフてお部屋へゆくと、下村と内野を呼んで来いつてんでしょう。妾さつと叱られるんだろうと思つてヒヤリとしたわ。二人が這入つてしまふと、妾次室で聞耳を立てていたただけれども、大分しんみりした話と見えて、ちつとも聞えないの。そのうちにお手が鳴つて紅茶を持つてお出でと云うのでしよう。様子を見ると叱られている風でもないので、妾安心したわ。

紅茶を上げてから、そう十一時頃でしよう。二人は書生部屋へ帰つて寝ちゃつたの。先生は未だ御研究に起きていらしかったようでしたが、もう寝ても好いと仰つしやつたので、部屋へ下つて寝たのよ。妾ウトウトとして、フト眼を覚すと、書斎の方で何だか変な物音がするのよ。先生が未だ起きていらっしゃるのだろうと思つて、寝返りを打とうと思つて、廊下の方を見ると真暗まづくらでしよう。書斎に燈がついていれば、それが差して、障子が白く暗に浮ぶ筈はずなんですもの。ハツと思うと、眼がすつかり覚めてしまつたの。念のため手探りで障子を開けて見ると真暗でしよう。その途端に確に書斎から人の出て来るような気勢けいせいがしたの。妾震え上つちやつたわ。床の中へ潜り込んで蒲団よだんを被つていたの。暫くすると四辺はしーんとして、もう物音も何も聞えないでしよう。妾恐々起きて、電燈を点けて見たの。それからまた暫く息を凝していたけれども別に何の變つた事もないので、少し元気が出て来て、廊下伝いに書生部屋へ出て、廊下の外から、下村さん内野さんと呼んだの。二人とも平常はそりや目